

## 第4回我孫子市文化交流拠点施設整備専門家会議概要

- 会議名 第4回我孫子市文化交流拠点施設整備専門家会議
- 日時 平成26年3月19日（水）16:00～17:35
- 場所 分館小会議室
- 出席者 [専門家会議委員] 足立委員・神野委員・野口委員[欠席：渡辺委員]  
[事務局] 大畑企画財政部次長兼企画課長  
増田生涯学習部次長兼生涯学習課長・木下課長補佐・高見澤主査長  
[関係課] 徳本環境経済部参事兼農政課長・増田農政課主幹・染谷商業観光課長  
山崎都市計画課長・西沢文化・スポーツ課長

■傍聴者 3名

■議題等

- 1 調査対象地の評価について
- 2 文化交流拠点の基本方針について
- 3 導入機能について
- 4 施設の規模及び概算整備費について
- 5 整備手法・運営管理手法について
- 6 今後の対応について

■会議概要

### 1 調査対象地の評価について

- [委員] しっかり捕えられていると思う。下ヶ戸・岡発戸が高野山新田より評点が上回っている点は何か。
- [事務局] 下ヶ戸・岡発戸の方が、項目として設定した「用地の道路付き」と「都市基盤のガス」の評価点で上回った。高野山新田は実際にはガス管が整備されていないことから、今回修正し、都市基盤については客観的な評価となるようにした。
- [座長] ガス管は現状、水の館付近までは通っている。厳密に言えば、未だ整備されていないという評価になっており、専門家会議では基本的にこの評価としたい。

### 2 新たな文化交流拠点施設の基本方針について

- [委員] 新しい施設の新規性ばかり謳われているので、あくまで今までの風土や歴史を捨てるのではないという意味でも、少し、我孫子の歴史や風土と連携した表現を書き込む必要があるのではないか。
- [委員] これは、高野山新田エリアのランドデザインに、自然と歴史・文化の一体的活用が謳われているので、この地域の文化芸術の振興の中にも、先人たちの築いてきた歴史や文化というものを尊重しながら継承・発展するという表現をあえて出すことは非常に大切なことである。
- [座長] 「経済の活性化」と言葉で言うのは簡単なのかもしれないが、あまりビジョンとしては個性的なものには見えない。委員からご意見をいただきたい。
- [委員] 経済の活性化という視点は重要だと思う。何をするにしても夢を追求すればするほど、お金がかかる話になるので、コストベネフィット（費用便益）の観点を踏まえてバランスのとれた計画とすることが重要であると思う。

この後の議論にも関わってくると思うが、基本方針にちりばめられている重要な観点は、整備する上でもプライオリティ（優先順位）が高い。核となる考え方が基本方針だと思うので、これを具現化するのによりふさわしい手法を選ぶという観点が重要である。

[座長] 現実問題として、市の施設として運営していくには経済的なコストに見合った、こういう施設なら利益が得られるのだということをきちんと意識していかなければいけない。そのためには、この基本方針を具現化する施設の整備とそのコストとのバランスを図った最適な手法を選んでいくという、意識は明確に持つべきである。

これは、議題の5で再度議論することになる。

この基本方針には、既に行った文化芸術団体のヒアリング調査で明らかになった課題や、市民活動が非常に盛んであるという状況も踏まえるとともに、さらに今までなかったものをどう付加し、そのポテンシャルをいかに上げられるかというような考え方が示されている。

まとめとして、歴史・文化を踏まえるということと、基本方針を実現するための手法、コストを意識した運営へつなげていくという視点を加えることとする。

### 3 導入機能について

[委員] 施設の構成イメージ図で、施設内の諸機能が閉じたイメージとなり、前段で謳ったまちづくりとどう関係するのか読み取りづらいところがある。よって、市民参加を必要とする機能の枠を施設外にはみ出させ、市民の方々との様々な連携の上に成り立つ施設であることを強調してはどうか。そうすることで、例えば、農産物直売所の充実には、市内の店舗や生産者と連携が不可欠であるなど、具体的にイメージし易いのではないか。ホール機能も、新しい市民活動が生み出されるイメージや、誰でも参加できる、開かれたイメージを伝える工夫が必要である。内容については、既に議論したことであるので、これからさらに詰めていかなければならないと思う。

[座長] これは施設の構成イメージ図として描かれているが、そこに実際に人が関わって施設が機能していくのであるから、外からその施設に関わっていく様々な人々の中に、どういうプレイヤーがいてどういう関わりをするのが、きちんとイメージできる図であるとよい。

[委員] 市民が見たときに、自分がどの辺りに関わっていけるのかが分かるようにした方がよい。

[委員] 基本方針③の地域経済の活性化は本当に重要なことである。市内外の人々をひきつける集客施設の併設が、地域経済の活性化に関わってくると思う。集客施設ということになると、民間の提案による民間の収益施設とリンクしていく概念だと思うが、この点については見えるような形で民間の提案を募れば、これまで想定していなかったようなものが寄せられることも多々あると思う。

細かい話となってしまうが、民間の提案を募るならば、この導入機能で謳ってある事柄に縛られて視野を狭めることのないよう、例えば交流促進機能のところ、その他というような概念も残しておくことよいのではないかと。

また、イメージ図というものは、あとあと引き継がれていくところだと思うので、同じように施設の構成イメージ図でも、有益な施設とするため、その他民間か

らの提案を含めた可能性を表記した方がいいのではないか。民間の提案を有効に活用するという考えがあるのなら、イメージ図は固定化するのではなく、その他の機能という部分を残しておくべきではないか。

本件については、実現すれば数十年に一度の大きなプロジェクトとなることから、公共施設の再編整備の一環としても位置づけていくと良いと思う。例えば、新潟県長岡市の「アオーレ長岡」が、市役所の機能とスポーツ施設を融合したような形にし、利便性も高くなったことから常時にぎわいが生まれている。こうした公共施設再編整備として位置づけて、それが相乗効果として賑わいの創出に大きくつながっている。こうした事例もあるので、施設機能の検討にあたっては公共機能の再編整備の観点で捉えていくとよい。

[座長]

2点ご提案をいただいた。地域の経済の活性化は非常に重要であり、今回作成している報告書が出来上がると、報告書に書かれていることを前提にやれば良いという考えに陥りがちである。今回検討している施設は、我孫子市の将来にとって重要な施設だと考えた時に、新たな民間からの提案などが出てくる可能性があるので、それを取り込むような仕組みが必要なのではないかという提案であった。

私はそれに加えて、「ハレ」と「ケ」の機能では役割には違いがあるから分立で良いという提案が前回あったが、一方でそれだと今までの機能がただ一か所にあるというだけなので、相乗効果がないと思う。そうすると、ハレとしての農産物の売り方として、見せ方、ブランディング（価値のあるブランドを構築するための活動）にもつながると思う。そういったことも組み込んでいかないと、人々をひきつけるということにはならない。目的を満たすための創造的な推進役としてこの施設が機能していくということが明確であってよいのではないか。その時に、私見であるが、創造支援機能という部分が重要になってくる。

今は、参加型の何かを作っていくという形となっているが、この施設そのもののクリエイティビティ（創造性）を発信し、デザインできるような機能というものも、そこに持たせても良いと思う。

創造支援機能が一点だけではなく、環境配慮型施設・ひとにやさしい施設と同じように、それぞれの機能が重なるようなイメージである。文化芸術発信機能でも新しいやり方・枠組みが生まれてくる。そして、先程の、民間からの新しいアイデアや提案をどう取り込むのかということも、創造支援機能が核になって交流促進機能の中に新たに何かを生み出していくこととなる。この機能は、すごく重要であるので、その位置づけをしていただきたい。

もう一つの、公共施設再編整備の位置づけも持たせるということは、専門家会議からの意見のまとめの部分に記載したいと思う。公共サービスを提供する主体としての、地方自治体の仕事のあり方というものをリデザインしていくというような、一つの実験的なプロジェクトとして、この施設も活かすことも我孫子市にとって非常に重要になってくるのではないか。今までのやり方の運用ではなく、目的のためにはこういうやり方が良いのではないか、あるいは複数の機能を一体化したら別の何か生まれるのではないか、そういったことをやっていくきっかけにする事例として活用すべきであるという、非常に重要なご指摘であったと思う。

[座長]

文化芸術発信ゾーンのところで、文化ホールというイメージから始まっている。古典的な枠組みとして「ホール」、「ホワイエ」の記述があるが、そこは手つか

ずのまま実現されてしまうように見える。ホールは「ホール」との記載が良いが、機能面に沿った書き方にして欲しい。楽屋も使っていないときには他の目的に使えるようなイメージを持たせて欲しい。

[委員] ゾーンをまたいで使えるところは使えるような表現にして欲しい。

[座長] 「私もここに関われる」ということが直感的に見えることが非常に大事であると思う。

[委員] 施設の構成イメージ図下の、「農産物直売所は文化ホール来場者の最短距離の動線上には設置しないことが望ましい。」という記述は、もう少しやわらかい表現にした方がよい。

[座長] 農産物直売所は、既存のイメージで良いのか。競争相手がたくさんいるのだから、土っぽくて生活の匂いがして生産者の顔が見えてという売り方だけではなく、丹精込めて作られた農産物を芸術作品のように美しく見せるという売り方もある。それなら動線上にあっても不可能でない。農産物直売所との相乗効果を踏まえて位置的な関係も検討していくという表現にしていきたい。

[委員] レストランと農産物直売所がオーバーラップしても良い。

[座長] どういう形で相乗効果を生んでいくのか検討していく中で施設配置を決めていく。また、施設を分けた時にはどういう相乗効果がうまれるのかという視点で議論していく。

#### 4 施設の規模及び概算整備費について

資料により事務局から説明を行った。続いて、座長より補足説明を行った。

[座長] 文化ホール機能から始まったので席数が最初にでてくるのは、今までの議論からすると異質な感じがする。参考程度にとどめていただいて、全体の中でどのような機能がどのくらいの面積比率で必要となるのかという記述の方が説得力はある。席数は大ホール1, 000席規模、小ホール300席規模に異論はない。

規模によって床面積を導き出しているが、機能から必要な面積を出していくという順番になるのではないか。近隣事例が根拠になっているということと市民活動から決めていくというコンセプトとはそぐわない。

[委員] 同感である。費用については整備費だけでなく、ライフサイクルコストの観点も入れていくことも必要だと思う。20年、30年市として負担が可能であるかなどから逆算してイニシャルコストを決めることもできる。

[座長] 住民負担のコストも、この後どのように内容を検討して運営スタイルを作っていくのか、市民との対話の中で決まっていくと思う。

[委員] ホールは席数ありきではなく、機能の実現に向けてどういうふうにやっていくのかを決めてから席数を決めていくようにしないと、施設はできても、うまく機能していかないと思う。

[座長] 近隣の事例はあくまでも参考である。機能や規模などについては、市民との対話を踏まえて形成していくということを謳って、あくまでもここでは参考程度にとどめておくべきである。

[委員] 駅から遠いのはメリットでもあり、デメリットでもある。街路でつなげていけばそこもまちとして活性化する。周辺部も含めた整備も予算化していくという言葉を入れられたら理想である。

[座長] 上位施策を位置づけたページがあったが、その他の計画との連携を図っていくということが重要である。景観デザインやエリアの魅力が人を引き付けることにつながる。あくまでもこれは近隣の事例から導いた参考例であり、実際の機能別の面積は、市民との対話から決めていく。他の施策と連携することでより魅力的で賑わいに繋がっていくという提案もあった。

## 5 整備手法と運営手法について

[委員] 参考という項目で何かを書くのであれば「目的達成のために最も効果的な手法をゼロベースで検討していきます」ということが一番であると思う。手法もいろいろ増えてきており、例えば、公共施設の運営権や負担付寄附など、幅広に載せておいてもよい。民間収益施設を排除しないのであれば、公共と民間の複合施設もPPPの収益施設の参考情報として載せるとともに、国の動きも踏まえておくと、のちのち支援も得やすい。

[座長] 載せてしまうと縛りを生む可能性があるが、新しい動きも踏まえておくと、施設の新しさを生むことや国の支援が得られるなど有利なこともある。目的や運営の仕方を決めていく中で、この施設を元気に回していけるようなフレキシビリティは大切である。スタッフが主体的に動ける手法は何かということも、重要な視点として入れていただければよい。金額を抑えても何もできないのであれば意味がない。

[委員] 民間収益施設のノウハウによって、市民の手を離れてしまうかもしれないという危惧を感じた。どういう立場でやっていくのか。

[座長] 優先順位を明確に語っていくことが必要である。

[委員] 財政削減のためのPPP活用というイメージを持たれているが、財政削減以外にも手法によっていろいろな側面がある。多様な側面を持つがゆえに理解されにくい。このプロジェクトで本当に目指したいものはなにか。それを活かす手法を選んでいけばよいと思う。

[座長] 整備手法については、ここでは確認していただき、これを市民とともに具現化していくときに精査していくという位置づけにしてほしい。意味のある指摘である。最終的にはコンセプトなど市民が有機的に関わっていくことが大切であるということが私たちの提言するところである。それについての意見を伺う。

[委員] まず、最初に10年間くらいの計画プログラムを作ってはどうか。例えば創世記・成長期・成熟期の3段階に分けて、創生期では、建設2、3年前くらいから建物を建てるまで、進行状況が目に見えるようなガラス張りのオフィスをつくって、花火大会等を利用してアピールする。また、ランドデザインの3本軸を一緒に整備していくべきであると思う。建設地が仮に高野山新田であれば、こういうものがそこにできるということを市民にアピールしていく。

成長期では、スタッフが機関誌を出したり、イベントを行って、周りに定着させていく。成熟期では、市外の施設と連携したり、様々な人による様々な使われ方が自然発生していく可能性を共有できるようなプログラムを展開していく。

[座長] 建設前から建設後までの機能が共有されてどのように関わっていくのか、目標設定をして新しい施設での展開をしていく。どのように計画を作っていくのかというところから議論を始める。成功事例の多くは、オープンする前からアウトリーチをしている。どういう機能でやっていくのか規模は小さくても周知していくことが望

ましい。アメリカでは都市再生に大学が関わっている事例がある。公共交通手段がほとんどなく、タクシーもほとんど走っていない財政破たんしたデトロイト市を視察してきたが、空き家ができそこが放火されるので、仕方なく市が買い取り、公有地が増えていく中、まちをどう再開発していくかメリット、デメリットなどを洗っていた。そして再開発の優先順位を決めていくと個人的な利害を乗り越えられるという事例であった。丁寧に時間がかかっても運営に関してもプロセスに関わった人が多い分、皆協力的になる。我孫子方式としていいものを作って欲しい。

これからは、市民も言いつばなしではなく、「あなたには何ができるのか」ということも求められるべき。本当の意味で市民と連携して活性化させていく時代になる。

[委員] 今の事例に集約されていると思った。これから機能や規模等について、丁寧なワークショップを行っていくと思うが、整備について市民は言いつばなしではなく、常に負担とセットであることを前提とすべきである。市民すべてで負担するのか、市だけが負担すべきものなのか、受益者負担でやっていくべきものなのか、コストベネフィット（費用便益）方式でやっていくことが必要である。賢明な市民が多いと思うので、コストベネフィットの視点で議論できると思う。

[事務局] 今後、これまでの意見はできるだけ報告書に盛り込んでいったん委員にお返しして、確認いただく。

以上